

NO.

44

最上の社会教育

2022



最上地区生涯教育推進協議会
山形県教育庁最上教育事務所

最上の社会教育
NO. 44
2022

最上地区生涯教育推進協議会

発 刊 に あ た っ て

最上地区生涯教育推進協議会
会長 沼澤 稔

新型コロナウイルス感染症の世界的流行から早くも3年が経ち、その収束はいまだに見通せない中ではありますが、「当たり前」となった新しい生活様式にも変化が見え始めてきました。入学からマスクと共に学校生活を送っていた小学3年生の子どもたちにも、少しずつ日常の生活が戻って来そうです。

さて、今年度の本会事業もコロナ禍ではありましたが、対面で開催することができ、多くの成果を残しながら終了することができました。改めて、関係市町村、関係機関・団体の皆様に感謝とお礼を申し上げます。

特に、今年度の地区生涯学習推進大会は第60回という節目の大会になり、多くの社会教育関係者のご参加をいただき鮭川村で開催することができました。地域住民の価値観や生活の多様化に伴い、社会教育の課題も少しずつ変わってきています。公民館活動と地域づくり、地域学校協働活動の推進、社会教育提供主体の変化、そして人材育成や研修の充実など、課題は多岐にわたっています。ややもすると、社会教育行政は国や県の施策に流されがちになります。「今、社会教育には何が必要なのか。」「地域や住民は何を要求しているのか。」など、足元を見ながら実践していく必要があります。60年、人間で言えば還暦です。サケは数年後に自分が生まれた川に戻る母川回帰をします。鮭川大会が社会教育の在り方を考える「原点回帰」の大会になることを期待しています。

また、今年度事業の特徴的なことがあります。それは、自作視聴覚教材コンクールへの作品応募や中学生ボランティアセミナー、Y Yボランティア交流会において、ある学校から数多くの参加をいただいたことです。参加者数の増加は嬉しいことですが、その活動を児童・生徒に紹介したり、教員に働きかけをしてくれたりしたことが、それ以上に嬉しいことです。審査に困るほどの作品が集まりました。セミナーや交流会では、会場に足を運んでいる校長先生の姿がありました。「やってみないか。」「生徒も楽しいと思うよ。」という何気ない声掛けで人は動きます。活動を通して地域を考えたり人と関わったりすることで、子ども達の豊かな心が育まれます。その輪が広がればと思います。

実践事例集「最上の社会教育」第44集を刊行いたしました。各市町村教育委員や青少年教育施設の皆様には活動事例をご提供いただき心よりお礼を申し上げます。それぞれの実践事例を知ることで、市町村の特徴や活動のヒントが得られるものと思います。ご覧いただくと共に、最上の社会教育が個性豊かに推進されることを願って挨拶といたします。

目 次<Web 版>

◇ 第44集の発刊にあたって

◇ 最上管内市町村教育委員会・県神室少年自然の家 社会教育・社会体育実践例

<新庄市>	◇旧農林省積雪地方農村経済調査所の活用を考えるワークショップ 「雪調のミライを考えよう」について	・・・	1
	◇新庄市の『モルック』普及活動	・・・	3
<金山町>	◇令和4年度 公民館学習講座「趣味を通じた学び」	・・・	5
	◇ウォーキングで楽しく運動習慣 ～とこみどりウォーク～	・・・	7
<最上町>	◇「最上町の青少年健全育成への取組」	・・・	9
	◇最上町スキー強化委員会クロカン部 秋季強化合宿	・・・	11
<舟形町>	◇舟形町しめ飾りづくり講座	・・・	13
	◇「縄文の女神」出土30周年・国宝指定10周年記念事業	・・・	15
<真室川町>	◇「公民館まつり」	・・・	17
	◇2022陸上教室	・・・	19
<大蔵村>	◇「おおくら葉山塾」	・・・	21
	◇「大蔵村健康体力づくり講習会」	・・・	23
<鮭川村>	◇川でつながるボランティア ～『SAKEKKO』の取組～	・・・	25
	◇さけすぼ祭の開催	・・・	27
<戸沢村>	◇令和4年度 とざわスケッチ大会	・・・	29
	◇とざわジュニアスポレク祭	・・・	31
<県神室少年自然の家>	◇あらためて神室少年自然の家の存在意義を考える ～主催事業「アドベンチャーキャンプ2022」を通して～	・・・	33
◇ 最上地区生涯教育推進協議会事業関係等		・・・	35
◇ 表彰関係等		・・・	51
◇ 生涯学習・社会教育関係各種大会のあゆみ		・・・	59
◇ 実践事例集「最上の社会教育」歴代掲載内容一覧		・・・	60

旧農林省積雪地方農村経済調査所の活用を考えるワークショップ「雪調のミライを考えよう」について

新庄市

1 はじめに

新庄市では、雪の里情報館の一部である「登録有形文化財（建造物）旧農林省積雪地方農村経済調査所庁舎」（以下、雪調という。）の保存活用計画の策定に取り組んでいる。本計画を策定することで、雪調の建築的価値を再認識することとした。本計画には、今後のまちづくり・ひとづくりに繋がる活用方法について記載している。

計画を策定するにあたっては、市民委員を中心に検討してきたが、広く市民の意見を集めるため、『旧農林省積雪地方農村経済調査所の活用を考えるワークショップ「雪調のミライを考えよう」（以下、ワークショップ）』を開催した。

2 事業内容

(1) ワークショップの概要

- ① 期 日 令和4年9月10日（土）
- ② 時 間 13時30分から16時
- ③ 場 所 雪の里情報館
- ④ 主 催 市社会教育課
- ⑤ 参加者 10代から70代の雪調に興味のある方30名
- ⑥ 内 容 雪里見学ツアー（雪里の建築の魅力をご案内）
開会・あいさつ
ワークショップ（雪調をこんな場所にしたい！を話し合う）
各グループの発表・まとめ



ワークショップのチラシ

(2) 実施内容

① 雪里見学ツアー

ワークショップを実施するにあたり、「はじめて雪調に来た」という方など、参加された方々で雪調に関する知識に差があったため、希望者を対象に、雪里見学ツアーを開催した。このツアーでは、雪の里情報館のスタッフより、雪調が建設された経緯や、雪調の建築の魅力について説明してもらった。参加者からは、「こんな素晴らしい場所があるなんて知らなかった。」や「改めて雪調の建築の良さを感じられた。」といった声があった。



雪調見学ツアーの様子1



雪調見学ツアーの様子2

②ワークショップ

ワークショップでは、年代や属性ができるだけ多様になるよう、事前に5グループに分け、各グループに事務局がファシリテーターとして参加してグループワークを行った。

グループワークのテーマは「雪調のミライの使い方を考えよう」として、以下の順番で行った。

- ・自己紹介
- ・雪調のこんなところ・空間が好き
- ・活用案（たたき台）への感想
- ・新しい雪調でどういう過ごし方をしたいか

グループワークを行った後、各グループから発表をしてもらった。

＜ワークショップの様子＞



グループワークの様子1



グループワークの様子2



発表の様子

③グループワークで出された主な意見

グループワークでは、雪里見学ツアーを実施し雪調の建築的価値について共通理解が図られたため、建物に対して特徴的なところを残してほしいといった意見が出された。また、雪害救済運動発祥の地であることや、当時の多様な文化人が訪れた交流の拠点であったことなど、雪調で取り組んでいたことを大事にした活用方法を実施してほしいといった意見も多く出された。加えて、交通アクセスを良くしてほしいといったことや、コミュニティづくりに繋がる活動をしてほしいなどの、まちづくりに繋がるような意見も出された。

④保存活用計画への反映

このワークショップで出された意見を基に、課題の整理を行い、保存活用計画への反映を行った。



保存活用計画で活用のコンセプト

3 成果（○）と課題（●）

- 広い年代、属性の方が参加してくださったので、当初の目的である、広く市民の意見を集める場として貴重な機会となった。
- ワークショップをきっかけに初めて雪の里情報館や雪調を訪れたという方もいて、雪の里情報館の認知度向上や保存活用計画策定に関わってもらえる方の増加につながった。
- 今後の改修やリニューアルオープンに向けて、新庄市の考えだけで進めるのではなく、新庄市の考えと市民の思いを相互に理解し合える貴重な機会となった。
- 今後、保存活用の方法を具体化するにあたり、継続して新庄市と市民の意見交換ができる場の設定が必要となる。

新庄市の『モルック』普及活動

新庄市

1 はじめに

近年フィンランド発祥の「モルック」が全国各地で普及しており、県内でも2021年12月に「山形県モルック協会」が設立され、各地でイベント等が開催され盛り上がりを見せている。

モルックは、チームで点数の書いた棒（スキttl）を倒して50点を目指していくのだが、倒した棒を起こす作業はしゃがんで立ての繰り返しで、見た目より運動負荷が高い。また50点を目指すための点数管理が必要となり脳の運動にもなる。

一投一投にチーム内で一喜一憂しながら試合が進み、参加者間での交流も生まれるため、モルックの普及が市民の健康保持、交流の場につながると考え、7月に体験会、11月に第1回大会を開催した。



2 事業内容

第1回モルック体験会

- ・開催日：7月24日（日）
- ・場所：すぽーていあ
- ・参加者数：35名
- ・ルール説明後、ランダムに3～4人1チームを作り、試合形式で実施
- ・参加者の声
「初めてモルックをしたが点数を数える頭の体操にもなって楽しかった」
「テレビで見てやってみたくと思っていたので体験出来て良かった」

【モルック体験会の様子】



第1回モルック大会

- ・開催日：11月26日（土）
- ・場所：すぽーていあ
- ・出場チーム数：9チーム
- ・第1位：最上サイレントクラブA
- ・第2位：最上サイレントクラブB
- ・第3位：三寿会
- ・参加者の声
「モルック体験会に参加し、楽しかったので大会に参加した。大会形式でできて楽しかった」



3 成果（○）と課題（●）

- 新庄市で初となる企画で参加者数が少ないことが予想されたが、多くの参加があり活気のある活動となった。
- 感染症が収束せず開催も懸念されていたが、感染症対策（3密回避、消毒、換気など）を行い、企画内での感染者を出すことなく終えることができた。
- 新庄市外からの参加や、10代～80代と幅広い年代の参加、聴覚に障がいある方の参加があり、目標としていた交流の場を創り上げることができた。
- 限られた時間の中で進行をスムーズに行えるよう、独自のルールを考え実施すべきだった。
- 今回は広報紙（市報）での周知となってしまう、広報紙（市報）をあまり読む機会のない若者への周知が不足した。より多くの方にモルック企画を周知するため、SNSを活用するなど情報発信を検討すべきだった。

【モルック大会の様子】



4 終わりに

新庄市で初のモルックイベントを開催し、多くの方にモルックの魅力を知ってもらうことができ、参加者からも「またやりたい。」という声が多く非常に好評であった。

コロナ禍で交流の場、運動する機会が激減したが、今後は、独自のイベント企画のみではなく、市民向けの出前講座や学校での普及活動も視野に入れ、モルックを通じて、市民の運動の場、交流の場を創出していきたい。

令和4年度公民館学習講座「趣味を通じた学び」

金山町

1 はじめに

金山町の「公民館学習講座」は、平成30年度から事業対象を小学生まで広げて行っており、令和4年度は、大人を対象とした「趣味の講座」と、小学生を対象とした「造形教室講座」の2分野で趣味を通じた学びの講座を開催している。



(趣味の講座 七宝焼き)

2 事業のねらい

(1) 目的

町民の生涯学習活動の意欲を高め、様々なジャンルの講座を提供することで、サークル等の活性化や、学びの機会を増やすこと。

(2) 令和4年度の講座

① 趣味の講座

(・大人対象 ・平日の午前中に開催 ・陶芸や寄せ植えなどの創作活動)

② 造形教室講座

(・小学生対象 ・土曜日に開催 ・中央公民館を活用しての創作活動)

(3) 抱えていた課題

例年同じ内容の講座を開催した場合、参加者が固定化しある程度の人数は確保できるものの、参加人数が横這いで推移していた。新しい講座を増やし、幅の広い年齢層からの参加の機会を提供できないか模索していた。



(小学生部門 造形教室講座)

3 具体的な取り組み

- ・ 人気のある講座の継続と拡充。
- ・ 新規加入者を見込んだ、開催希望の多い講座の新設。
- ・ 町広報誌での案内や、申込用紙を全戸配布するなど周知方法の工夫。



(趣味の講座 寄せ植え教室)



(趣味の講座 焼き物教室)

4 成果と課題

(1) 成果

- ・ 講座内容が更新されたことにより、少人数であったが、新規参加者が加入して、参加者全体の学習意欲が高まった。
- ・ 新たな講師を招聘したことにより、マンネリ化が解消され、様々な話を聞いた。
- ・ 講座の内容に広がりができたことにより、参加者の満足度が高まり好評であった。

(2) 課題

- ・ 今後も継続できるよう、人材発掘や多岐にわたる講座や運営を改善する。
- ・ 町民への周知方法をより一層強化する。
- ・ 町民ニーズを把握できるような情報収集を行い、あわせて参加者の声を大事にしていく。
- ・ 男性の方にも参加しやすい講座を検討する。

5 終わりに

令和4年9月の公民館機能の移転を契機とし、更なる公民館講座の充実を図るため、他市町村の公民館講座を参考にするなど、情報の共有や新たな講師の発掘などを検討していきたい。

ウォーキングで楽しく運動習慣 ～とこみどりウォーク～

金山町

1 はじめに

金山町では、糖尿病や高血圧などのいわゆる生活習慣病の患者が多く、脳梗塞に罹患する方が県全体と比較しても2割以上多い状況となっている。これらの課題を改善するため、町では若手職員を中心としたプロジェクトチームを結成し、課の垣根を超えた様々な提案を行った。

ここでは重点課題の「町民の健康づくり」の3本柱の1つである、健康づくりの定着を図るための事業、歩こうイベントの「とこみどりウォーク」について紹介したい。



2 具体的な取り組み

「とこみどりウォーク」は令和3年10月末にウォーキングイベントの「1週間でどれだけ楽しくたくさん歩けるか！」から始まった。

10月に予定されていた「とこみどりマラソン大会」は、コロナ禍により、残念ながら中止と判断された。このような状況だからこそ、体を動かしてリフレッシュすることが必要ではないか、感染防止対策を行いながら取り組めることがないかなど、金山健康ふれあいスポーツクラブ、町スポーツ推進委員会などで議論を重ね、有酸素運動でもあるウォーキングをベースにした「歩こうイベント」が誕生した。

参加対象として、町内在住者もしくは町内に勤務している方を対象とし、総勢134名の参加があった。町内の企業やグループなどからも団体として11チームの参加があり、平均歩数として1日9,500歩を超え、健康指数とされる8,000歩を大きく上回った。



令和4年度は健康増進を大きく進めることを目指し、「歩く」ということを町民運動として展開するため、金山健康ふれあいスポーツクラブを主体として、1週間程度の歩こうイベント「とこみどりウォーク」を春・夏・秋の年3回開催と、プチイベントを実施した。プチイベントでは、1人で歩くのは気が進まない、不安があるという方のために、早朝・日中・夕方など様々な時間帯や場所でノルディックウォーキングを開催し、多くの方に参加頂いた。

併せて町内9カ所のモデルコースを作成し、コース毎に「距離・歩数・所要時間」の目安を記載し、ウォーキングに特化した「かねやまウォーキングマップ」も作成し、町内全世帯に配布をおこなった。

また、6月5日に東京都健康長寿医療センター研究所運動科学研究室長の青柳幸利氏を講師として招聘し、「とこみどりウォーク」キックオフ講演会を開催。群馬県中之条町での全住民を対象とした20年以上にわたる、身体活動と病気予防の関係性についての調査（中之条研究）を実施し、そこから導き出された研究結果を基に、1日あたりの歩数と活動強度で予防できる病気・病態など具体例を交えながらご教示いただいた。



3 おわりに

令和7年度までに参加率が町民の約3割の1,500人、全体の1日平均歩数8,000歩を目標とし、町民運動として推進できるように、庁内全課体制を構築したい。

街灯や歩道の整備などの安全対策、健康マイレージとの連携といったハード・ソフト両面の対応と、イベント期間中に「歩く」に関連した小規模イベントの継続など、多角的なサポートを行いながら歩く機会の創出を通じて「運動習慣」が定着し、健康に対する関心が高まることを目指している。

歩こうイベントをきっかけに、「家族や友人と一緒に歩いて楽しかった」という嬉しい報告がたくさんあり、楽しい健康づくりの一助となったのではないかなと思う。

